
井戸、蛙、そして恋。

宮城 龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

井戸、蛙、そして恋。

【Nコード】

N4857P

【作者名】

宮城 龍

【あらすじ】

井の中の蛙が恋をした。そこから始まる史上最大の青春、そして恋愛の感動物語。ラストシーンの主人公が魅せる奇跡に、あなたの涙が止まらない。

春、出会い（前書き）

「ねえ翔輝、知ってる？井の中の蛙の話には続きがあるってこと」

「続きなんてないだろ」

「嘘だと思うならこれみてよ」

「これか？えっと、《井の中の蛙、大海を知らず。されど……

》」

春 出会い

高校3年の春、すっかり散ってしまった桜の木の横を俺は走り抜ける。始業式の今日、早速俺は遅刻ぎりぎりの登校。

「遅えよ、翔輝」

「ちよつと寝坊しただけだよ。また一緒のクラスか、純」

「やっぱ俺ら運命だろ。3年間同じクラスって」

若干俺も運命感じてたけど、こいつ 岸部 純 とは一番の友達。ってことは親友？ま、いいや。

「はいみんな、今日から君たちの担任をすることになったの橋口美樹といいます。教科は数学を受け持っています。つい最近この学校に来たから、わからないことも多いと思います。だからいろいろと迷惑かけると思うけど、よろしくね」

三十くらいだろうな……とか思いながら外の景色を見る。この席からの景色は最高なことを前の席にいる純に教えてあげる。

「早速だけど、みんな簡単な自己紹介をしてくれるかな？」

教室がざわめく。俺も自己紹介なんてのは、正直苦手だった。

「静かに。出席番号1番の子から、その場に立って。そうね……、名前と趣味と部活、それから何か言いたいことがあれば、言ってみようだい」

1番の奴から俺の番まで早く感じた。純は一発芸をしてクラスの雰囲気のを和ませた。まあ、俺にとっては重度のプレッシャーになったけど……

「えっと、久原翔輝です。趣味は読書で部活は茶道部に入っています。よろしくお願いします」

「お前嘘しかついてねえじゃん！」

純の一言でみんなが笑う。実際意外に趣味は読書なんだけど。純と同じで部活はサッカー。一応訂正して席に着く。

自己紹介も最後の女子一人になった。

「えっと、渡辺舞です。趣味は読書で、部活は茶道部です」

「えっ！」

思わず声を出す。

「お前も同じ嘘つく気かよ！」

また笑いが起こる。

「さっき久原くん？にわたしと同じこと言われて、正直困ったんだけど」

「えー！嘘じゃないのかよー」

またまたみんなが笑う。調子に乗ったまま純は俺の方を向いて謝れとジェスチャーしてくる。謝れって言われても……。後で謝ることにするか。

噂

「渡辺さん、さっきはごめん」

休み時間、席まで行って謝る。

「いいよ。だってわたしも嘘しかついてないから」

そう言って舌を出してくる。そんな仕草に魅力を感じてしまう。

俺は渡辺さんの隣の席に座って、本当は何部なのか聞いてみた。

「バスケだよ。久原くんとは初対面だね。はじめまして」

ああ、よろしく。と言おうとしたら始業のベルになる。

「まだ聞きたいことあるんだけど！」

席に戻りながら叫ぶ。いいよってくちぱくで伝えてくる彼女に、自然と笑みが漏れる。

「何にやにやしてんだよ翔輝」

「うるせえな。てか純、渡辺さんのことどう思う？」

「渡辺？ ああ、さっきの奴か。あんまいい噂は聞かないけどな」

「噂？ なんだよそれ、教えてくれよ」

純はふうんと言って横目で見てくる。

「恋したんだな。でもやめとけ、あいつは。誰にも言うなよ？ 渡

辺、あのキルハラとつきあってるらしいぜ」

キルハラ……そいつはこの街で一番恐れられてるヤンキーだった。

確か三年前にこの学校を卒業したらしい。最近殺人事件が多いけど、その犯人はキルハラと噂が立つほどだった。本当の名前は桐原大。

殺人事件の噂が立ってから、桐原とkillerを文字ってそのあだ名がついた。

「それ、まじかよ……」

ほとんどひとりごとのように呟く。いい子だと思ったんだけどな、久しぶりに。俺は中学の時本気で好きだった子に振られてからずっと女には興味を示さなかった。高校1年の時は、クラスで一番と言われていた子に告られたのに振った。かわいかったけど、響くもの

が全然感じられなかったからだ。それからは……俺は陰で〈蛙〉と呼ばれるようになった。もちろん侮辱の意味で。ー井の中の蛙、大海を知らずー俺は井戸の中で威張っている蛙なんだ。その言葉を、国語の授業で習って初めて〈蛙〉の意味を理解した。悔しかった。でも、純だけは俺の気持ちをわかっていてくれた。落ち込んでばかりいる俺にある日、

「久原だったけな。お前、蛙って言われてるなら、蛙らしく威張ればいいんだよ。そもそもここは学校だろ？井の中なんだよ。みんな外を知らねえのに威張ってばかりいる。もちろん、お前がかわい子を振ったからって、威張っているとは全然違うって俺は思ってるぜ。だから、逆に俺らは胸張って威張っていようぜ。他のみんなとは違うんだ！って威張っていよう。俺入学したときから、お前とは仲良くなりそうな氣してたんだ。これから俺と友達になろう」

俺は、一瞬で純の良さを感じた。

「俺で良ければ！」

最高の笑みでそう言った。今思えば高校にもなって友達になろうって……でもそういうところがあるから、俺は純に惹かれたのだろう。それからはずっと純と行動していた。恋愛なんて考えてもなかった。でも、今日俺は、恋してしまったんだ。

結局その日、俺は渡辺さんのところには行かなかった。噂だから嘘かもしれない。だけど、俺は信じることがまだできなかった。

親近感

次の日、久々に早く学校に着くと、まだほとんど誰も来ていなかった。俺の席……窓際の一番後ろに座ると、景色を見る。そこには森と川、そして散ってしまった桜の木。桜が満開になると最高に綺麗なんだろうな、と思う。知らない間にうとうとしていた俺は、肩を叩かれて起きる。誰だよ、と顔をあげると、そこには渡辺さんが立っていた。

「おはよう、久原くん。昨日聞きたいことあるって言ってたから……」

「ああ、昨日ちょっと用事あって。じゃあ今聞こうかな」

俺は出身中学とか、最近何してるのかとか、どうでもいいようなことを質問した。渡辺さんは、そんなこと聞きたかったの？と、笑っていた。どんなことでもいい。話をできるだけで、全然良かった。

「てか俺のこと翔輝って呼んでよ」

自分でも信じられない発言。でも、それだけ親しくなりたいんだな、俺。

「わかった。翔輝ね。じゃあわたしは舞って呼んでもらおうかな」
いい名前だと思った。その気持ちはそのまま俺の口から発せられた。

「舞……いい名前だな」

舞はふふつと笑い、翔輝もいい名前だよ、と言ってくれた。俺はこんなにもいい子が、キルハラと付き合ってるなんて想像できなかった。

「私ね、学級委員やりたいんだよね」

「学級委員？」

「うん、今日のLHRで学級委員決めるって、橋口先生が昨日言ってたでしょ？私、挑戦しようかと思って」

橋口の話なんて聞いてなかったな、と反省する。

「いいじゃん、やりなよ。俺はやろうとか思ったことないけどな」
「そうなんだ……。私翔輝と一緒にやりたかったんだけどな。このクラスに仲良い男友達いなかったからさ。でも、やりたくないなら仕方ないよね」

まじかよ……。舞が俺と一緒に学級委員したい？これチャンスだよな……。ここは思い切ってみるか。

「舞が学級委員やりたいうって気持ち大切だと思うし、俺もやつちやおうかな」

「ほんと？」

喜びに満ちた顔。うん、やっぱり俺は舞が好きなんだな。でも学級委員とか、俺そんなキャラじゃないんだけどな。でも、好きな人と二人で同じ仕事ができるかと思うと、思い切って良かったと思う。

「じゃあ今日のLHR、お互い立候補しようね。翔輝」

心臓の音がリアルに聞こえてくる。なんだよ、このドキドキ感。今までにないな、きつと。 「おう。ありがとう」

「こちらこそ、ありがとう」

蛙

LHR・の時間。

「みんな、昨日も言っただけ、学級委員に立候補する人はいるのかな？」

舞と目を合わせて手を挙げる俺。これから楽しみだな……

「勇気あるわね、君たち。女子は渡辺さんね。男子は……あら、二人いるみたいね。どうしましょう」

えっ、二人？嘘だろ。周りを見渡すと、一番前に座ってる奴が、堂々と手を挙げている。まさか、あいつが……

「じゃあ、多数決を取りましょう」

久原くんがいいと思う人……あら、渡辺さんだけ？なら中川くんに決まりね……

話はほとんど聞こえなかった。せっかく舞と仲良くなれるチャンスだったのに。純は、俺が舞と仲良くなるのに反対していたから、手を挙げなかったんだろう。

「純、俺やっぱりあいつが好きなんだよ……」

純はこっちを見ずに、

「女には裏があるんだよ」

そう言って、ため息をつく。舞の方を見ると、悲しい顔をしていた。それが俺の心を支えてくれた。中川……こいつは俺を最初に蛙呼ばわりした、憎い奴。なんであいつが……

《蛙には学級委員なんてむりだろ》

中川の後ろ姿がそう言っているように見えた。なにもできない自分に苛立つ。しかし放課後。

「お前、学級委員なんかできんのかよ」

その声の主は、純だった。そして純の前に座っているのは中川だ。「関係ないだろ？お前も蛙の仲間かよ」

はははと大声で笑う中川。そしてつられて笑うその仲間。

「俺はな、お前らみたいに井の中で威張ってるわけじゃねえんだよ。ちゃんと外の世界を知ってる。だから学級委員もやれるんだよ」
純は中川の胸ぐらを掴む。

「結局暴力なんだろ？ やっぱり蛙だな、お前」
手を離す純。しかし純は負けてはいなかった。

「俺が蛙なら、お前は人間のクズ野郎だ。いつか上司にぺここするタイプだろ？ 蛙はな、井の中でただ一匹威張っている。その方がかつこよくないか？ 自分が一番だって心の底から思ってる。小さい世界だけど、それが蛙の世界だ。自分の世界で堂々としてれば、その方が俺はいい」

そう言って純は、俺の方に来て、

「翔輝、部活行こう」

なにか中川が叫んでいたけど、俺は気にせず純について行く。今日はサッカーの調子が良かった。証拠に、ミニゲームで純からのパスを上手くシュートした。純は俺を見て、

「俺ら、やっぱ運命の二人だな。蛙らしい堂々コンビプレーだ。

ナイスシュート！」

と言ってくれた。俺は、蛙も悪くねえな……と、一人ほくそ笑む。
その日の飯は、最高に美味かった。

好きのちから

「おはよう。今日はもうすぐある歓迎遠足の話し合いをして欲しいの。私の数学の時間をあげるから、学級委員の二人が仕切ってやってくれる？ 新入生への出し物を考えてくれればいいから。私この学校初めてでしょう？ だからみんなの方がよく知ってると思うし、学級委員の初めての仕事ぶりも見てみたいし……」

話長いんだよな橋口は。話に対抗するおおきなあくびをして、舞の方を見る。あの日から、学級委員が決まったその日から、俺と舞はあまり会話をしなくなった。純が言うには、中川が舞に俺の悪口を言っているとか……。なんで俺ってこんな不幸なのかなと思う。井の中でさえも威張れなさそうだ。

「おい、翔輝。お前今日出し物の案出せよ。中川にいいとこばかり持っていかれるのも嫌だろ。それに、まだ渡辺のこと好きなんだろう？ 好きなら、学級委員の渡辺を助けてやるのも当たり前のことだぜ。翔輝見てたら本気で好きな気持ち伝わってきたし、渡辺には変な噂あるけど、俺はお前を応援するよ」

「ありがとな。純なら俺の気持ちわかってくれると思ってた。出し物の案、一緒に考えてくれよ」

純は昔から、こういった出し物を考えるのが得意だった。高1の時からずっと出し物は純が考えていたほどだ。純はいいとこばかりだ。女にももててるみたいだし。

「俺らにとって高校最後の遠足だし、1年を楽しませてやりたいし、真剣に考えなくちゃだよな」

いつもはふざける純だけど、たまに見せる真剣な顔がきつと、女の心を奪ってるのだろう。サッカーをしてる時の顔も真剣そのものだった。今思えば、俺がサッカー部に入部したのも、純に誘われたからだ。打ち込むものがなかった俺に、サッカーという楽しいスポーツを教えてくれた。

「やっぱり、お笑い系がいいんじゃないかなあ」

純が呟く。俺も純に助けてもらってばかりだし、案出してみよう。

「簡単な劇なんかどうかな？ お笑いも入り混ぜてさ、この学校の紹介劇みたいな感じで。どういう笑いにするかまでは考えられないけど」

ほおと感心する純。

「いい案じゃねえかよ翔輝。見直したぜ？ その案、ちゃんと発表しなよな」

そう言って親指を立て、白い歯を輝かせてくる。おう、と俺も親指を立てて返事をする。舞にいいところみせなくちな。

勇気

「では、数学の時間だけど、歓迎遠足の出し物について話し合っ
て下さい。学級委員の二人、前に出てきて」

中川と舞が並ぶ。似合わねーぞ中川！、と純が叫ぶ。みんな笑う。
純の支持率、相変わらず高いなあ。

「えー、なにか案を考えた人」

純のグーサインを力に、手を挙げる。

「久原くん、どうぞ」

中川は先生の前だけ真面目ぶる、薄情な奴だった。

「俺は、劇がいいと思います。学校の紹介劇みたいな感じで。笑
いも含めるとさらにいいかな、と」

「俺もそれがいいと思いますーす」

純の後押し。いつも助けてくれる。まあ、数学が苦手な純の助け
をするのは、俺だけだ。 「他に、意見がある人」

手は挙がらない。普通、こういうのに意見出す人いないだろうけ
ど。

「じゃあ、これでいいですか。賛成の人は拍手を」

パチパチパチ……

純はこれ以上はないってくらい、大きな拍手をしていた。それを
見て、にやけてる俺って……。

ふと、何か視線を感じ、その方を見る。舞だった。舞もまた、大
きな拍手をして、俺を見つめていた。顔が赤くなっていくのが、自
分でもわかった。

それに比べ中川は、感情を持たない顔をして、冷たい目線を俺に
向けていた。きっと、また蛙が威張ってるぜ……なんて思っている
に違いない。いつもは落ち込む俺だったが、舞の笑顔を見ている
と、そんなことどうでもいいなと思えてきた。まだ俺は舞に恋した
ままだったなと気付かされる。

「翔輝、良かったな。渡辺もおおきい拍手してたし、今日のお前はひと味違うぜ！」

大袈裟に背中を叩いてくる純、その痛さは、嬉しさにかき消された。

「いやあ、緊張した」

そう言って笑い合う。

両思い？

「翔輝、謝りたいことがあって……」

数学の時間が終わった休み時間。舞が話しかけてくる。

「まあ、いいよ。まったく気にしてないし」

えっ、と舞。

「全部知ってたの？私が気まずいオーラ出してた理由も」

「大体わかったた。でも、舞なら俺を信じてくれると思ってたしさ」

ごめんっ。深々と頭を下げる舞。

「わたし、中川くんに翔輝の変な噂ばかり聞かされてたの。それで最初は信じちゃって……。でも翔輝見てたら、翔輝が噂されるようなことするわけないって思って。だから、ごめんね……」

「ううん。信じてくれてありがとう」

「ほんとごめんね。それと、遠足の出し物の案出してくれてありがとうね。出ないと思ってたから、すごく助かった。……かつこよかったよ」

そう言うと、舞はすぐに席に戻っていった。

「あれはお前に惚れた顔だな」

隣で見ていた純がボソッと呟く。

「そんなわけないだろ」

と言いつつ、頭の中ではーかつこよかったよーの一言がずっと旋回していた。若干自分がにやけているのがわかった。

「なあ、純。渡辺はほんとにキルハラと付き合ってるのかな」

純には俺と舞が下の名前で呼び合っていることを伝えていない。きつと気付いてはいるだろうけど。

「どうだろうな。でも翔輝の言うとおり、俺も、渡辺とキルハラが付き合っているとは思えなくなってきた」

純が俺と同じ意見を持つてくれることは、嬉しかった。

「だろ？俺、確かめてみようかと思って」

すぐに、どうやって？と身を乗り出してくる。

「尾行……かな」

「尾行なら俺も付き合うぜ。昔からそういうの好きだしさ。でも、渡辺にばれたら面倒だぞ？」

「それは覚悟してる。でも直接は聞けないし、この目で確かめてみたいんだ」

「わかった。堂々としてるな、翔輝。さっきの案出しで目覚めたか？」

ははっと笑う。

「俺は、蛙らしく堂々とするのが目標だからね」

「頼もしいねえ！翔輝さん」

二人で笑い合う。気付くと、早く教室に入った、次の授業の先生がこつちを見て言った。

「仲がいいのね、あなたたちは」

「はい！」

二人の声がハモって、俺らはまた、笑い合った。

尾行計画

尾行は一週間のうち唯一部活が休みの月曜日に決行することになった。今日は水曜日。それまでに俺らなりの作戦を練ることにした。「とりあえず、ばれたら意味がないからな。まずはどう尾行するかを考えよう。翔輝はいい案あるか」

「そうだな……。変装はまず無理だし、車は使えないし。ちよつと今ひらめいたんだけど、二手に分かれて携帯でお互い情報を取り合うってのはどう？」

「俺もそれがいいと思う。二人一緒に行動しちゃまずいだろうしな」

「じゃあそうしよう。純、確か尾行得意だっただろ？俺が先回りするから、尾行頼んでもいいか」

「任せとけ！尾行ばれない歴十年の俺がしつかり任務をこなす」
いつから尾行やってんだよ……。そう突っ込みながら俺は月曜日が楽しみで仕方なかった。純となら何でもやれる気がする。いや、やれるのだ。純とだからこそ。

月曜日までの日々は短く感じた。土日はどちらとも練習試合だったからだ。土曜日は不調だったが、日曜日は純のアシストで俺がゴールするという、まさに月曜日への勢いを高める試合になった。その日の夜、純は俺の家に来て二人でジュースで乾杯した。純曰く前夜祭らしい。そこまで大層な行事でもないのに相変わらず大袈裟なんだからなあ……。純が帰った後、ベッドに潜ったが、なかなか眠れない夜となった。気付いたら朝になっていた。窓の外で小鳥がチュンチュン鳴いている。普通の朝なのに新鮮に感じた。

実行日の朝

「ちょっと早く着きすぎたかな……」

そうぼやきながらまだ誰もいない教室に入る。席について外を見る。そういえば新学期早々、舞と今日みたいに早い時間から話したなあ。すこしにやけていると、誰か入ってくる気配がした。もしかして舞かも……。そう期待したのだが、あいにくそいつは中川だった。

「よう、蛙。休み明けなのに早起きとは偉いな。いや、威張ってるだけか」

ははは、と不気味な笑みを浮かべながら席に着く。その背中に俺は、

「お前だけには絶対負けねえから」

と呟いた。いや、あえて聞こえるように言った。

「生意気言うなよ、蛙のくせに」

そのときだった。舞が教室に入ってきたのだ。なんともいえない空気が三人の間に漂った。「おはよう……」

最初に口を開いたのは舞だった。

「おはよう舞」

そういったのは中川だった。舞……？なんで呼び捨てにしてるんだよ。怒りと悔しさが込み上げた。同時に闘争心も湧いた。

「絶対負けねえ」

そう俺は言い残し、教室を出た。特に行くところは無かったのだが、あの空気に耐えられなかった。今頃二人で話しているかもしれないが、教室には戻れなかった。校門の近くのベンチで純を待つことにした。

四月とはいえまだ肌寒い。我慢できず俺はベンチの上で小さい体操座りをした。そして顔を沈めた。

「翔輝」

肩を叩かれた。声の主は舞だった。

「舞……。どうしてここに？」

「中川君と一緒に居づらくて……。隣、座ってもいい？」

「そっか。どうぞ」

ありがとう。そう言っただけで舞は俺と同じように隣で体操座りをした。その小さく丸まった体は本当にかわいかった。

「俺さ、中川と仲悪いんだよね」

「うん……。見てたらなんか分かるよ」

「そうだな。でさ、俺、蛙って呼ばれてる」

なぜだか分からなかったが、舞の前で俺は素直な自分を出せていた。

「蛙……。なんで？」

「井の中の蛙ってことわざがあるだろ？俺は狭い世界で威張ってるらしい。あいつらからはそう思われてる」

「そうなんだ……。こんなこと私が言っているのか分からないけど、私が見る限り翔輝は蛙には全然みえないよ？逆に……」

「逆に？」

舞はふふつと笑って言った。

「中川君のほうが蛙みたい」

俺も笑っていた。

「ありがとう。舞に言われると嬉しいよ」

「でも蛙もかわいいじゃん。女の子はみんな気持ち悪い存在にしてるけど、私は結構好きなんだ。ちょっとひいちゃうかな……？」

不安そうに見つめてくる。正直意外だった。けど本音を話してくれていることが嬉しかった。

「意外だね。でも舞が蛙好きなら俺も蛙でいようかな」

そう言って二人で笑い合う。そして、いいと思う、と舞は言ってくれた。

いつの間にか時間がたち、続々と生徒が登校してきた。

「そろそろ教室に戻ろうか」

俺と舞は同時に立ち上がり、教室に向かった。放課後の計画のことはすっかり忘れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4857p/>

井戸、蛙、そして恋。

2010年12月14日23時04分発行